

南蛮の風紀行－21. 孤愁のザビエル城－1



ついにわたしは今回の旅行のハイライトであるザビエル城頭に立つことができました。キリスト教を日本に最初に伝えた人がザビエルであることは、みんなが知っていることでしょう。そして、わたしが今、目の前にしている古風な城が、そのザビエルの生家なのです。この城から見える景色は何世紀もの間、変わっていません。城の西側に密着するように古風で質実剛健そのものと言える教会が建てられています、この教会だけは1901年になって建てられたものです。ザビエルの時代の城の様子は、展示されている模型で偲ぶことができますが、とても子どもが暮らすのにふさわしいとは言えません。少年ザビエルが暮らしていた部屋も堅固な石造りで、つい、冬はさぞかし寒かったであろうと想像してしまいます。



ザビエルはこの城で生まれ9歳で父を亡くすまでこの城で育ちました。父親はナバラ王国の宰相として、150キロほど離れたパンプローナに兄たちと暮らして居ましたが、アラゴン王国に責められパンプローナ城が落城した時に戦死しています。幼いザビエルはここで母や姉の愛情に包まれて、この城で何の不自由もなく育っていたのですが、パンプローナが陥落した後、ザビエル城を明け渡すことになり、母親と共に母方の伯母を頼って

落ち延びて行ったそうです。

ザビエルが書いた手紙を読むと、公式の報告書であれ、友人への私信であれ、彼が純粹で真面目な人だということが判ります。日本人を大いに気に入ってくれていたことも、う



れしいことです。人の性格は幼少期の環境に大きな影響を受けるそうです。城から見渡せる景色はどこまでものどかで、やさしく、イベリア半島の大部分で感じた自然の厳しさは感じません。

ザビエルがこの城を去ることになったナバラ王国とアラゴン王国の戦争の時も、この城は戦場になっていません。兄たちはパンプローナ陥落後も、ナバラ王国の復活のために、フランスの力

を頼って、パンプローナ奪還の戦いに臨み失敗しています。ザビエルは母の強い意向も働いて、その間も戦場からは遠ざけられていました。成人してからパリに進み、学者になることを本人も家族も望んでいたのです。

ではなぜ彼はイエズス会に入信、というよりイエズス会の創始者のひとりになったのでしょうか。またそうでありながら、なぜヨーロッパに留まらず、インド、マラッカ、日本、中国と布教して回る道を選んだのでしょうか。そこまでは、この城は教えてはくれませんでした。

わたしもまた、ザビエル城を前にして今、別のことを考えています。500年の時空を駆け遡って、わたしは再び戦国末期のキリシタン信徒に思いを馳せていました。ザビエルが鹿児島に上陸して初めて日本にキリスト教の神の存在を伝えてから、わずか半世紀、1614（慶長19）年に徳川幕府によって禁教令が発せられるまでに、日本のキリスト教徒の数は75万人にも達していました。わたしが考えているのは、どうしてそんなに短期間（約50年）に大量（75万人）もの、しかも志操堅固な信者集団を生み出すことができたのかという事です。

1873（明治6）年の明治政府によるキリスト教解禁までの実に259年もの間、見



ザビエル城の広場に立つザビエルの肖像画。インドのゴアに立って布教をしている姿ということで、右手に地図を持っています。タイル絵で一枚だけ剥がれていました。

つかればむごたらしい拷問にかけられ、死罪になるかも知れないことも覚悟の上で、九州を中心とした各地に「潜伏キリシタン」「隠れキリシタン」として、正式な司祭もおらず、従って正確な祈りの儀式や秘儀に接することなく、節操を全うした数万人の人々がいたのです。その間には島原の乱を始めとして幾度となく弾圧事件もありました。

幕末、既に開港されていた長崎に、フランス人宣教師によって大浦天主堂が建てられていました。そこに1865（元治2）年、当時の大村村の住民数人が天主堂を訪れ、自分たちがキリスト教徒（キリシタン）であることを告白しています。その中の一人、52歳の「ゆり」という女性は「イザベリナ」という洗礼名さえ名乗ったという事です。

もちろん、時はまだ江戸幕府の時代です。2年後の1867（慶長3）年には彼女たちは、長崎奉行によって捕縛され拷問を受けています。ただ、それを知った諸外国の非難の的になったこともあって、明治維新政府が信教の自由を保障するのですが、天下晴れて信者と名乗れるようになるまで、それからさらに6年も要しているのです。

戦国末期の日本人の精神風土の中に、キリスト教を受け入れる、あるいはキリスト教の教えに共感するものがあったということもあるでしょう。しかし、わたしはやはり誰がそれを伝え、教えたのかということの影響に注目します。初めにやってきた宣教師が、同じイエズス会の会士であるフランシスコでも、フランシスコ・カブラルのような人であったなら、日本人はキリスト教に心を開いていたのでしょうか。このフランシスコ・カブラルは東洋人を西洋人よりも劣ると考え、権威主義によってのみ日本人を改宗させようとした、しかも日本語での布教や日本人の司祭の育成すら必要ではないと考えていた人です。アルメイダもこの人の差別的扱いを受けて、相当苦勞し死期を速めているほどなのです。

翻ってザビエルの純粹さ、素直さ、神に対する一途な信仰心、日本人に対する畏敬と親愛の情などを考えれば考えるほど、16世紀の日本にザビエルが残した足跡の偉大さに打ちのめされるほどの感動を覚えます。